

自己評価報告書

平成23年 4月25日現在

機関番号：10101

研究種目：新学術領域研究

研究期間：2008～2012

課題番号：20101001

研究課題名（和文） 『ユーラシア地域大国の比較研究』に関する総括

研究課題名（英文） General Overview of "Comparative Research on Major Regional Powers in Eurasia"

研究代表者

田畑 伸一郎 (TABATA SHINICHIRO)

北海道大学・スラブ研究センター・教授

研究者番号：10183071

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：世界システム ロシア 中国 インド 帝国論

1. 研究計画の概要

(1)本領域研究では、国際関係、政治、経済、歴史、社会、文化を含む社会科学・人文科学の諸分野からロシア、中国、インドなどのユーラシアの地域大国を総合的、学際的に比較する研究体制を取っている。ユーラシアの地域大国が、地域大国として発展・定着できる条件は何であるのか、また、それを妨げるような不安定要因は何であるのかという視点から比較を行い、各地域大国の特殊性、固有性の理解を深めることが第1の目的である。

(2)地域大国としての共通性を抽出することにより、地域大国が現代世界を主導する中軸国（米国、EU、日本など）に代わる何らかの新しいモデルを提示しているのかを検討する。

(3)世界システムを意識して行うこのような比較に基づき、世界システムのなかに地域大国を位置づけることが最終的な目的である。

2. 研究の進捗状況

(1)現実の世界においては、我々の想定以上に、中国やインドをはじめとする地域大国の台頭が著しくなっており、それに押される形で、主として現代の地域大国を分析対象とする社会科学系の計画研究班では、各地域大国の発展に関する分析やその世界システムのなかでの位置付けに関する分析が着実に進行している。たとえば、経済の分析では、現代のいわゆるグローバル・インバランスを米国の経常収支赤字と地域大国の外貨準備の増大の問題として捉え、世界システムと地域大国の関係を「再生ブレトンウッズ体制」の文脈で理解しようとする研究成果が出てき

ている。

(2)より長期的な視野で研究を進めている人文科学系の計画研究班においても、人間の移動、文化の接触やその相互受容、知識人の自国認識など、いくつかの共通するキーワードを軸に、研究が重なり合って進行しており、注目される成果が現れている。とりわけ、国境・言語圏を越えて発展するメディア環境の下で文化の均質化が進展する一方で、文化的ステレオタイプとしての国家・民族表象の再生産、伝統の再創出、文化的価値の商品化といった複雑な現象が起こっている状況は、この地域の社会の現代への適応と将来の方向を示唆するものとして、ディシプリンを超えた共同研究の対象となっている。

(3)現在までに、外国人研究者招聘者数が10数名、参加者総数が100名を超える規模の国際シンポジウムを計4回開催した。こうした国際シンポジウムは、計画研究班が順番に担当しており、それぞれの分野での比較を深めるとともに、学際的な討論の場となっている。また、国際シンポジウムに合わせて、日本語で行う全体集会も開催しており、各計画研究の成果をすり合わせる場となっている。

(4)本領域研究のディスカッション・ペーパーである『比較地域大国論集』をこれまでに計5冊刊行した。国際シンポジウムや全体集会などの報告や議論を収録している。このほかに、本領域研究では、ホームページに多くの成果を掲載しており、平成23年3月のホームページの閲覧回数は、1カ月間で2万1000件を超えた。

(5)本領域研究のニューズレターをこれまでに計8回出版した。このニューズレターは、本領域研究のメンバー以外の希望者にもメールで送られており、送付者数は127人を数える。

(6)本領域研究の研究成果を市民向けに分かりやすく紹介する公開講座「地域大国比較の試み—ロシアを中国やインドと比べたら何が分かるか?」を平成22年5月に札幌で計7回開催した。本領域研究に参加している研究者が講師を務め、受講者数は87名を数えた。同様の公開講座は、平成23年度にも予定されている。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

本領域研究を構成する6つの計画研究において、注目される研究成果が現れている。とくに、日本の内外で開催された国際会議において多くの成果が発表され、問題の設定や方法論とその成果が世界の関係学会でも注目されている。また、各計画研究の成果のすり合わせを行ううえで、総括班がイニシアティブを發揮している。

なお、平成22年度に行われた本領域研究全体に対する中間評価においても、A評価(研究領域の設定目的に照らして、期待どおりの進展が認められる)を受けた。

4. 今後の研究の推進方策

(1)これまでも、計画研究(ディシプリン)ごとの研究をすり合わせる作業を計画研究班の間の様々な共同企画によって進めてきたが、今後はこうした作業を本格的に展開する。まず、近接する計画研究の間、とくに、社会科学系の計画研究(第1班から第3班まで)と人文科学系の計画研究(第4班から第6班まで)のそれぞれにおいて、研究成果をすり合わせていくことをより強力に推進する。これに加えて、基本的に冷戦後の世界を研究対象とすることの多い社会科学系の計画研究と、17世紀に遡るような帝国期とその崩壊期を視野に入れる人文科学系の計画研究の成果を統合していく作業を本格化させる。

(2)本研究の最終成果は、日本語では6巻本の研究書にまとめられる予定である。とくに平成23年度と24年度の各計画研究班の活動は、この本の出版を念頭に置いて進められることになっており、全体の調整は総括班会議で行う。

(3)研究の方向性については、中間評価においてA評価を受けたので、とくに大きな変更

を加えていない。中間評価におけるコメントのうち、「世界システム」、「文明圏」、「帝国」などの大概念、あるいは、大きな理論的枠組みに関する検討をより積極的に行うこと、また、地域研究者の「相互乗り入れ」による研究に関する方法論的な検討を行うことに関しては、総括班のイニシアティブでそのような研究会を組織する予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計65件)

①田畑伸一郎・上垣彰「現代の国際金融構造におけるロシア、中国、インド」『比較経済研究』第48巻第1号、15-26頁、2011年、査読有。

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_03/achievements/files/201101_uegaki_tabata.pdf

②Kimitaka Matsuzato and Fumiko Sawae, “Rebuilding a Confessional State: Islamic Ecclesiology in Turkey, Russia and China,” *Religion, State and Society*, Vol. 38, No. 4, pp. 331-360, 2010, 査読有。

[学会発表](計65件)

① Akira Uegaki, “Development in Global Economy: China since Deng Xiaoping and Russia since Gorbachev,” 42nd Annual Convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies, November 19, 2010, Los Angeles, USA.

②宇山智彦「グレートゲーム再考：中央アジアにとっての帝国間競争の意味」国際政治学会2010年度研究大会、2010年10月29日、札幌コンベンションセンター。

③Shinichiro Tabata, “Common Features of the Russian Economy with China and India,” 11th Bi-Annual Conference of European Association for Comparative Economic Studies, August 27, 2010, Tartu, Estonia.

[図書](計21件)

[その他]

ホームページ

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/index.html>